明治期の文語文と口語文

教材のねらい

この教科書では、古典（古文・漢文）と近代の作品の間に、明治期の過度期の文体の特徴を示す文章を、五編紹介している。江戸から明治への転換は、さまざまな「社会」のあり方、「制度」の変革であると同時に、「言葉」の世界における大きな変化の時期であった。

言葉の記録として伝えられた作品や文書のあり方も、新時代のメディアの変革と共に拡大し多様化していった。それを支える人々もさまざまで、変革期ではいつ頃どのような教育を受けたかによって、その表現も変化していった。学校で漢詩文による教育を受けた世代が、数年後には英語など外国語も学んでいくといった変化も見られる。ここに出した五人の個性的な表現を考える時、どういう教養の基盤を持っている人なのか、何歳の時の表現なのか、どういうメディアによってその表現が定着されているのかなど、いくつかの要素を考える必要がある。

「古文」「擬古文」から「言文一致体」までの変化の概略は、ぜひ生徒に伝えたい。それが、わずか二十年ほどの期間で急激に変化したこと、そうした中で近代の文学者は表現の質を高め、新しい世界を開拓していったことを理解してもらえるとよいと思う。

和歌や古典文学の素養の上に立って、樋口一葉は、会話を地の文に組み込み、一文の長い文体で心情の揺れを描く。北村透谷になると、漢文の用語と、西洋文化に支えられた概念が結び付き、格調のある文体が達成される。自由民権運動の清水豊子の演説口調は、文語体でありながら動きのある心情を伝え、きびきびしている。幕末から高座にかけていた作品が明治の速記本によって活字で伝えられた三遊亭円朝の落語は、臨場感豊かな描写が新鮮だ。そうした動きの中で、二葉亭四迷が言文一致の文体を小説に応用し、新しい心理小説、写実小説を確立する。二葉亭であっても「浮雲」を書き始めたときはまだまだ古い感じの表現だが、書きながら言文一致を磨いていく。教材本文は、その変化がなされた後の文例なのである。

近代小説の世界でも、森鷗外「舞姫」は、文語文であっても、使われている概念は新しい時代のものだ。かえって、その緊張関係が作品の魅力となっている。この五編だけでなく、明治の名作を多く紹介しながら、文学者の実験の様を伝えていきたいものである。

評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1)ア
(2) 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解している。〔知・技〕(2)ア
(3) 時間の経過や文化的特徴などによる言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。〔知・技〕(2)エ
(4) 言文一致体や和漢混交文など歴史的な文体の変化について理解を深めている。〔知・技〕(2)オ
(5) 「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容について叙述を基に的確に捉えている。〔思・判・表〕B(1)ア
(6) 進んで明治期の文語文と口語文を読んでさまざまな文体の特徴を知り、今までの学習を生かして、近現代の文体や文章が古代からの文脈の延長線上にあることを理解しようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕

（中島国彦）